The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	室町時代より江戸時代にかけての漢學
Author(s)	武藤, 長平
Citation	懐徳. 1934, 12, p. 27-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88909
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

室町時代より江戸時代にかけての漢學

武藤長平

一

室町時代は鎌倉時代に引續き禪の流行をみた、禪僧は漢學の宣傳者であつた、所謂五山文學なるものは方外の餘技であつて筍蔬の氣(1)に滿ちて居たかも知れないが、室町時代の漢學は全く五山學僧の手によりて成長した、博士家や公卿にも漢學研究が行はれて居たけれども學僧のそれに比すれば振はざること甚だしい。

室町幕府は其組織上の手落や統率者の不行屆からして強力なる政府を形成するには至らなかつた、特に應仁の大亂前後は統制全く缺けて其權勢の基礎を弱くし、封建國家の礎石に動搖を來すに至つた。同じ禪にしても鎌倉時代の禪と室町時代の禪とは少しく行方を異にして居ると思ふ。時宗の修禪と義政の耽禪とは大に距離があると考へらるゝ、鎌倉の禪は簡樸直截の氣に富み、室町の禪は枯淡の内に豪奢を含む、一例ではあるが金閣銀閣の樓觀は幽閑なる林樾と相俟ちて其藝術的價値を全たからしめ自然の裡に占め得た閑室は其内容には複雜を藏するものがある、其外貌は民間の陋屋と何の相違も無きも、其内には無量の奢侈と氣品とを盛つて居る、鎌倉の政治が當時の國情に則した潑剌なものであ

つたに反して室町の施政は放漫と姑息とに滿ち國家統治の體系を備へて居なかつた。禪僧が大陸より輸入した漢學や支那藝術はかなりよく室町時代に消化されたやうに外見にはうつるが、之が眞相は充分の檢討を要することゝ思ふ。鎌倉室町兩時代に於ける大陸との交通は禪學漢學の如き精神的饉よりも當時貴族富豪の物質的慾望を滿足さすべきものに重きを置かれたやうであつた、鎌倉時代の博多は日本上流社會の要求品を輸入し又た薩摩の坊之津は攝家の私領に屬する貿易港であつた。室町時代になると支那貨幣の獲得に熱中し、其財政上の弱點を除く資を得んが爲には名義上の主權を犧牲に供して憚からざるに至つた。而してかゝる支那通商を滑らかに進捗せしむる爲には當時支那の學問と文明とを理解する五山禪僧の才幹手腕に其援助を借らなければならないのであつた。是れ蓋し當時支那貿易の副産物として所謂五山文學なるものが構成された所以である。

世には尊氏の夢窓疎石を尊崇したことや、義滿の義堂周信に指導を受けたことや、義政が禪的教養に眞の理解ありしことなどを其例證として室町將軍の行藏を禪空の妙諦や漢學の教義に結びつけんと試むる史家もあるが是は如何のものであらうか、五山文學の眞の價値は賴山陽の論詩絕句二十七首の五山文學評に盡くるではあるまいか。(2)室町時代の如き不統一な政治不健全な思想、放縱と淫奔との過犯に滿ち、好ましからざる一種の貿易法によりて僅に國政の資力を滋しつゝある如き國情にあるものが何の餘裕あつて大陸學藝の妙諦を玩味し消化し體得し得るであらうか。

(1)、(2)、衣中廿八顆明珠、風雅終然墮筍蔬、出類故當推絕海、指揮始意捌鯨魚、

二

應仁の大亂後京都を中心とした學藝の淵藪は地方に分散するに至つた、是は當時大陸文明を最もよく理解し得たる禪僧と本邦典故に精通したる公卿の擾亂を避けて比較的平和なる侯伯の治下に走つたからのことである、防長に於ける大内文學の發達、薩日隅に於ける島津文學の成長は正に其例證となるものである。關東に於ける足利學校と金澤文庫とは武家が公卿の學藝や禪僧の學問に薫染したから起つた結果である、室町時代に於ける足利學校と金澤文庫との使命は僧侶の修學と典籍の保存とに在りて、其餘德餘烈は全日本に及んだといつても過言ではあるまい、特に足利の易學研鑽と祕籍蒐集とは戰國時代より江戸時代に及ぶまで其風格を保持し、今日に至るも其存在の意義は毫も滅じないものがある。足利と山口とは東北と西南との學藝の中心をなして室町より戰國にかけての戰塵から遠ざかり、郁々たる文苑として五山の學藝を維持し時に或は其學藝を一層奥衍ならしむるものがあつた大内文學は室町文學の縮圖であつて其學風其藝道に全然共通するものがあり、大内義隆は義政將軍と同一型の文藝保護者であつたから、政治的統制力に弛緩を生じて其統治は破綻を來たし國の滅亡を見て藝術偏愛者の陷り易き末路を辿つた。室町大内の兩文學は常に貴族の要求愛護する美術學藝等の發展にはかなり大なる貢献をなしたが、眞の漢學の研究には其援助に資すること多大なりとはいへない、

之を江戸時代漢學の非常なる發達に比すれば其差雲泥といひ得るかも知れぬ。すべて外國の高尚なる學藝を體得するには平和なる歲月の援助を受けることが何より肝要なる一條件かと思ふ。前述の如く室町時代は大陸より資源を仰ぐことを以て最大の良策なりとなして、足利將軍はもとより諸侯伯皆な擧けて之が政策の遂行に努力を吝むものではなかつた、大内細川兩氏の勘合船を爭ひしが如き其適例であつて、將軍侯伯皆な進貢船によりて巧妙なる外資輸入法を講じつゝある如き情態にて、禪僧は野心ある將軍侯伯の懇請によりて海外修交の任に當り樽俎折衝の役を演じ、時に方外修德人の爲すを潔しとせざることをも敢てするの己むなきに至りしこともあつたやうである。但々禪僧は大陸に游ぶを以て概ね翰墨に長じ作詩に妙であつた、而して時運の然らしむるところ身に禪衣を披て心は闕里に赴くもの比較的多く、宋學提唱の先鞭を着け得た點が日本漢學史上に非常なる貢献をなしたことゝなる。桂菴玄樹の島津文學に於ける、雪舟等揚の大内文學に於ける其錚々たるもので岐陽方秀が桂菴の先輩として已に新注訓點に先鞭を着けて居たことはいふまでもなく、宋學東漸と新注國讀に關しては從來幾多の論難が繰返されて居たことは學界周知のことである。

禪僧の詩は「瘦硬」(1)であつて「參學の暇、藝苑に從事す、師承各々異り、體裁も亦た岐れ」(2)「玉石相ひ混ぜざる能はざるなり」(3)といふべく、數多き詩僧中義堂周信と絕海中津とを以て其中の巨擘となし」台閣儒紳の及ばざるところあり」(4)となすべきである。

五山文學に伴ふ刊書流行のことは當時海外修交の結果外國貿易に關係深き商業都市たる堺、山口、鹿兒島、兵庫等に漸く盛にして其勢或は帝都を凌ぐものあるに至つた、特に堺の如きは特殊なる都府自治制を有し、市の常備軍を有すると同時に個人の好書癖より上梓頻々たるに及んだ。(5)さりながら其刊書より觀察すれば當時學問の內容が如何なる程度のものであつたかゞ分明になり、所謂五山文學なるものゝ學的程度が正確になる。

(1)(4)「書後題跋」(賴山陽)

(2)(3)「日本詩史」(江村北海)

(5) 正平板論語」「醫書大全」「增注唐賢絕句三體詩注」「韻鏡」

三

陰鬱なる室町時代の幕が落ちると潑剌なる安土桃山時代が展開し來る、世は攻城野戰に籌策謀略に日も足らざる如き亂離の世相なれども何となく快活なる光景がみゐて來た。英姿颯爽たる織田信長が顯はれて撥亂反正の功業を創める、「天下布武」を以て旗幟となし、兵馬倥偬の際靜座讀書の暇無きを以て敎壇學界の偉傑を招致して耳學問に見聞を廣め、從來の慣習故舊に捕はれず自由にして進步的なる政治を布いた、先づ足利氏が皇室を疎じ奉りたる誤れる思想を一掃し去つて、新に皇室の供御を增し宮闕を修理し奉り頗る愼重の態度を以て其政權を確保し更に進んで社會秩序の恢復に腐心し、一向宗の勢

力を殺ぐに基督教を以てした彼は佛耶儒のいづれにも偏することなく、社會維持に必要なる教化は何の躊躇も遠慮もなく自由自在に之を活用した、足利將軍や大内氏が當時の學僧を尊崇したると全く異りたる態度を以て學德兼備の高僧を優待して施政上の參考に資した、策彥周良の如きは彼が推服傾倒したる一傑僧であつた。

安土桃山時代は國家統一の大事業が時代の意識に上り、信長、秀吉に次ぐ家康の周密なる統禦政策が實現せらるゝ前提をなしたる時で、其美術の如きも多樣なる形態、豪華なる彩色が其特徵とされ、足利季世の枯淡瀟洒なる藝術と甚だしく相違するものがあるといはれて居るが、漢學の發達は左樣著るしき特色を顯はして居ない、前に足利時代が漢學の發達に不便なる時代である如く安土桃山時代も決して學藝の進展に適應した時代ではない、唯だ從前の如く海外交通の門戶たる都邑に海外輸入の或る程度の學藝が停頓情態を繼續して居るのみである、藤原惺窩の慶長元年薩南に下りし如きは蓋し斯邊の消息を洩すものである。

夫れ戰國將士の勞苦は非常なもので何の暇あつてか大陸學藝の芳醇に陶醉し得んや、學藝の伸長は如何にしても泰平の惠によらなければならない、惺窩羅山時代の漢學は比較的幼稚なものであつたといふ譏は免れ得ぬ、元祿以後になつて徂徠白石出づるに及んで漢學隆盛其極に達し來り、幕府に倣ふ雄藩の聖廟建設は一種の宗教々育の如き風格にて人間最高の道義を敎ゑ、日常彝倫の德行を勵し、醇化

せる儒教を以て各藩々校の教育方針を定め、封建國家の組織に順應するところあらしめた。長崎の一港を通して舶載せらるる典籍は江戸幕府は勿論諸藩の競ひて購求し、其統治管内の有識階級を滿足せしめた、而して時代の進行につれて一般社會が學問に關心し來り、漢學者の研究論議は文字訓詁、修身道義、政治經濟、歷史地理、文學藝術、自然科學の諸方面に及んだ、漢學は武士階級と深い關係をもつて居たことは無論であるが更に一般社會即ち諸階級の間にも珍重せらるゝに至つた、是れ實に漢學なるものが種々の要素を包容して居る爲である。江戸幕府の政治組織は決して完全なるものではない、唯其統治機能の周密なる運用によりて兎にも角にも三百年の太平を致したことが日本漢學史上に大なる貢献を致したものであるといふ結論を得る。

附記、江戸時代漢學の推移に關して、今少しく論議したいと思ふが、頁數にも制限あるから茲に一先づ擱筆する。

（昭和九、七、二三）

懷德

三四